

## 附 属 資 料

1. 団長所感
2. 国立公園の保護管理体制（伊藤勇三）
3. ダーウィン研究所の体制（安齊友巳）
4. ガラパゴス特別法（邦訳）
5. エクアドル政府-チャールズ・ダーウィン財団間の合意書（邦訳）
6. 主要新聞記事
7. ガラパゴス諸島日本語文献目録
8. 携行機材リスト
9. 油流出事故に係る国立公園事務所の活動概要
10. 影響のあった野生動物の最終報告概要
11. 収集資料リスト

## 1. 団長所感

ガラパゴス諸島、世界自然遺産第1号。チャールス・ダーウィンとその進化論を生んだ島。今なお独自の進化を遂げた様々な動物植物がすむ島々。形容詞はたくさんあるが、現在まで大部分が手つかずで遺されているすごい島々である。

そのガラパゴスに油が流出する事件が起きた。幸い油の質、海流、風の向き等幸運に恵まれ、素早い初期活動もあってこの貴重な島と周辺海域に棲む野生生物に与えた影響は最小限ですんだ。しかしこの事故は、この島の生態系がきわめてもろく弱いということを我々に認識させた。過去にも何度も発生している山火事による影響もあった。

今改めて考えるべきは、この地球上に遺された宝石をいかにして後世に伝えていくか、であろう。

しかし、このガラパゴスは観光地でもある。もっとも厳重に管理されつつある国立公園でもある。一万五千人を超える住民も住んでいる。六万五千人を超える観光客も訪れている。従って当然ながら多くの問題も抱えている。環境衛生上の問題、侵入生物の問題、エコツーリズムの徹底、管理の充実、調査研究の充実等々。今回の事故は、改めて世界中の人々の目をこの島に向けさせた。

今回の調査団はこうした視点に立って、ガラパゴスの陸と海の生態系を守るために何をすべきか、何がなされているか、何が足りないか、その内日本として何に協力できるか等について考えることを目的として派遣された。短期間の調査であったが、多くの方々のご協力により現状把握と概ねのニーズはつかめたと考えている。エクアドル国レンドン環境大臣、外務省サラサル前日本大使、国立公園管理事務所とダーウィン研究所の方々等多くの方々に厚く御礼を申し上げたい。

2001年3月

調査団 団長

菊地 邦雄